

ごとく、腫瘤が骨盤腔に陥入触知し得ぬ場合でも、下血例については十分に念頭に置くべき疾患であると考えらる。

50. 食道血管腫の 1 例

高石 寿, 小野田昌一, 佐々木一元
(高石胃腸病院)

食道血管腫は非常に稀であるが、私共は最近、その一手術例を経験したので報告する。患者は 56 才の主婦で、約 3 カ月前より嚥下困難、吃逆などの愁訴を訴え、漸次増悪した。左開胸開腹、食道下部、胃体部切除、空腸移植術により、治癒せしめた。

腫瘍は 2.5×2×1 cm で、平滑、黒褐色、弾性柔であり、組織学的には食道粘膜下の海綿状血管腫と思われる。食道良性腫瘍の報告は稀で、またその多くは平滑筋腫である。演者などの検索の結果、食道の血管腫は内外の文献に非常に稀であると思われるので、その一治験例を報告した。

51. 10 年間の大腸疾患の統計と興味ある症例について

吉川 正宏, 中村 武 (中村病院)

中村病院の 10 年間の手術総数は 5,592 例で大腸疾患手術数は 134 例 2.4% である。術式別には、直腸切断術が 57 例 42.5%, 回盲部切除 20 例 14.9%, S 状結腸切除 11 例 8.1% などとなる。良性疾患は 33 例で、ポリープ、ポリポージスが 9 例、潰瘍性大腸炎 7 例、炎症性腫瘍 5 例などである。大腸癌は 101 例で 40 才以上が大部分で、発生部位では直腸癌 56 例 55.8%, S 状結腸癌 11 例、回盲部癌 10 例、上行結腸癌 10 例などであった。大腸穿孔症例は 134 例中 6 例 4.5% に発生し、腫瘤、腹痛、発熱を訴えるものが多く、原疾患は種々で一定の傾向はないが、全例治癒した。また手術せる潰瘍性大腸炎は 7 例あり、大腸手術例の 5.2% にあたる。全例に下血あり、直腸型 4 例、全大腸型 2 例、S 状結腸型 1 例であった。直腸型の 1 例に再発をみとめた他は、良好な経過である。また全大腸型の 2 例に大腸全剥回腸直腸端々吻合術を行なったが、目下のところ出血などの症状もなく、経過順調である。

52. 胃切除後有愁訴例の内視鏡的検討

小池 良夫, 植竹 光一, 田畑陽一郎
(植竹病院)

「胃・十二指腸吻合の全層縫合系およびクランマーは術後短期間に簡単に落ちる」という漠然とした常識に対

して考察を行なった。胃切除後有愁訴例 130 例につき、内視鏡的観察を行なった結果、絹糸使用時 (105 例) では、胃内腔に絹糸 (19 例)、クランマー (4 例)、絹糸およびクランマー (5 例) の露出が認められた。一方カット・ゲート使用時 (25 例) では、術後愁訴例は減少し、クランマーの露出のみで良好であった。絹糸は術後 3 年 10 カ月、またクランマーは術後 2 年 3 カ月経ても露出が認められ、したがって、将来胃腸縫合器のクランマーの材質問題が論議の焦点となる時がくると思われた。なお、27 才の女性で、胃切除後、約 9 カ月を経て、腹痛、嘔吐が出現し、開腹にてトライツ靱帯より約 5 cm の空腸粘膜の皺襞に、胃・十二指腸吻合時の絹糸の一端がからみついて固着し、他端に葉々がからみついて腸閉塞を起こしていた症例を経験した。

53. 放医研における乳癌治療の現況

碓井 貞仁, 恒元 博 (放医研)
大川 治夫 (千大)

昭和 36 年～46 年の 11 年間に 284 例の乳癌患者が来院し、237 例の患者を治療した。年令別では 40 代が最も多くついで 50 代、30 代であり Stage 別では II が 102、以下 I が 53、III が 48、IV が 8 例であった。

治療としては術後照射が大部分で 185 例に施行され、術前照射 45 例、手術施行例 22 例であった。5 年生存率は 71% (54/76) 7 年生存率 50.2% (26/51) 10 年生存率 47.6% (10/21) で実行治療別に見ると術前照射施行群は 83% 術後照射施行群は 82% と好成績を示した。年令別にみると 39 才以下では 5 年生存率 100% で 40 代、83% 50 代 62%, 60 代 40% と若年者程予後はよく、Stage 別では I が 100%, II が 86%, III が 50%, IV が 0% であった。

再発のため来院した患者 29 例と治療中の再発 27 例の再発部位は前胸壁が最も多く 20 例、腋窩 4、鎖骨上窩 7、頸部 6 の順であった。再発時期は 1 年以内 16、2 年 13 と比較的早期の再発が多く、予後も 1 年以内の死亡が最も多く、5 年生存率は 21.7% (5/23) と低かった。

54. 埼玉県下における乳癌の検診 1 年間の結果報告

横田 俊二 (幸手病院)

埼玉県医師会において県下の乳癌の検診を初め、昨年本例会においてその方法について述べた。今回はその一年間の結果報告と統計的観察について述べる。過去 1 年間の検診者総数は 1,916 名で、市町の都会において有所見者数は約その 25% で、農村地区においては 12.8% であった。これは、人工栄養を主とする都会の主婦と母乳